ミス 被害につなげない

命のとりで 名大病院患者安全の現場から

㊤ 事故対応と未然防止

医療事故の未然防止や再発防止を推進する医療安全管理者の配置が4月から、全国すべての病院に義務づけられた。名古屋大病院（名古屋市昭和区）は全国の国立大病院に先駆け、15年前から患者安全担当の専任教授を置き、業務改善や人材育成に取り組む。人が関わる以上、避けられないミスにどう向き合うのか。命を守る「とりで」である医師らの歩みを追った。



看護師らが慌ただしく行き交う診察室裏のバックヤードで、左腕に腕章を着けた一人の医師がゆっくりと巡回していた。気になることがあれば立ち止まり、スタッフの行動を注視する。名大病院患者安全推進部の長尾能雅（たかまさ）副病院長（57）。「患者の名前を確認しているか、投薬の注意点を学んだ直近の研修内容が理解できているか。こうした巡回が患者の安全を守ることにつながる」と話す。

患者安全推進部は、一歩間違えば重大事故になりかねないヒヤリ・ハットの事例や医療事故の報告を受けて検証。再発防止につなげる部署だ。

5月、手術で患者の患部に注射器で洗浄液をかけようとした際、針が外れて患者にけがを負わせる事故があった。事故後、同部のスタッフらはすぐに病院内で使う針と注射器の規格を調べ、特定の組み合わせは針が外れやすいと突き止めた。製造業者の確認も得て、6月中旬からは注射器と針が外れない組み合わせのみを使うよう徹底した。

長尾さんは患者安全推進部に着任した2011年以降、こうした取り組みを責任者として続けている。もとは呼吸器内科医。名大病院に入局した01年当時は、全国の病院で深刻な医療事故が相次いでいた。名大病院でも02年に手術中の大量出血死亡事故が起きるなど、現場の縦割りや連携不備が事故につながる危険性を感じずにはいられなかった。

「事故の時こそ一丸となり、患者への被害を最小限に抑えなければならない」。そう考えた長尾さんは呼吸器内科で働く傍ら、医療事故に詳しい弁護士の勉強会に参加し、海外の文献を取り寄せて患者安全について独学した。その姿勢を買われ、05年に京都大病院に医療安全管理室長として招かれた。11年に名大病院へ戻り、患者安全の専任教授に就任した。

名大病院では、医療事故が起きた後の適切な対応と事故の未然防止を二本柱に据える。12年ごろからはトヨタ自動車と提携し、現状把握から要因分析、対策の立案といったトヨタの品質管理手法を医療の質向上に取り入れた。

25年に病院内で報告されたヒヤリ・ハット事例は約1万4千件。うち医師からは約1千件で、10年と比べ倍増している。

長尾さんは、報告が増えれば増えるほど、医師たちがこの問題に真摯に向き合っていることを示していると強調する。こうした報告から再発防止策を考える取り組みは、患者の検査結果や容体変化についての伝達ミスを減少させており、成果につながっている。

一般社団法人・日本医療安全調査機構が公表した25年の全国の医療死亡事故発生報告数は375件。「医療を人間がやる以上、ミスは起きる。それを人体への被害につなげないために、医療界はあらゆる知恵を結集しなければいけない」と長尾さん。リスクを最小化する試みは今日も続く。

院内を見回る長尾教授＝名古屋市昭和区の名古屋大病院で

県内版

おたまじゃくし

〈こころの声〉

（リトミックで親子でぎゅーっと抱き合っていたら、母親の耳元で）
孫　しあわせだね

つづき・たいが（3歳）＝豊田市、祖母・都筑ゆかり

〈自画自賛〉

祖父　めいちゃんは、かわいいねー！

孫　かわいいよー！

あらかわ・めいか（2歳）＝南区、祖母・荒川弘美

〈目が悪いだけ〉

孫　あっ、飛行機！

県内版

ノウハウを全国で活用

命のとりで　名大病院患者安全の現場から

(下) 責任者認定制度

名古屋大病院（名古屋市昭和区）の研究棟で6月中旬、全国から集まった10人の医師たちが医療現場の業務改善について事例発表に立った。「転倒、転落による骨折、頭蓋内出血などの重傷事例をゼロにする」「入院中の飲食物による回避可能な窒息を撲滅する」。掲げた目標に対しどう成果を上げたか。熱を帯びる声に、患者を守りたいという意志がにじむ。

10人は、不測の事態に適切に対応できる医療者養成を目指す、名大の「CQSO（最高質安全責任者）プロジェクト」の参加者たち。約半年にわたり各職場と名大病院を行き来して患者安全や人材教育のノウハウを身に付け、150時間のカリキュラムで患者安全の実務を学ぶ。

研修の終盤には効率的な部署間連携や医療業務の手順整備など、現場で起きている問題への対策を立案し実践する。修了すると、CQSOに認定される。

7期生となる今回の10人を含め、これまでに認定されたのは57人。現在では名大病院の患者安全のノウハウが、多くの病院に活用されるようになった。



過去の取り組みについて話し合うがん研有明病院の山本医師ら＝東京都江東区で

知多半島総合医療センター（半田市）の岡田禎人病院長（61）は、2021～22年のCQSOプロジェクト3期の研修に参加。「問題解決をするときには現場に答えがあることを学んだ」と振り返る。

センターは5期研修にもベテラン脳神経外科医1人を派遣し、得られた知見を基に医師や看護師、技師らの間での情報交換を活性化させた。脳梗塞の疑いがある患者にMRI撮影をせず見逃す事例について、軽微な症状でも検査を受けやすくするために、技師らと協力して検査時間を短縮。検査数が増えたことで、脳梗塞を発見できなかった事例は22年の13件から25年には3件まで減った。

高度ながん治療に当たるがん研有明病院（東京都江東区）では、CQSO1期生の山本豊・医療安全管理部長（53）が看護師や薬剤師らを含むチームを率いる。

山本さんらのチームは、がん患者の痛みを和らげるために麻薬を投与する医療機器のスイッチが頻繁に壊れる事例に対処。患者が痛みを感じるとスイッチを強く押し込む傾向があり、破損することを突き止めた。この問題を今年3月にメーカーに報告すると、メーカーは改善に前向きだったという。山本さんは「不測の事態に備えれば、医療者が実力を発揮できる環境を整えられる」と話す。

15年に及ぶ名大病院の患者安全の取り組み。プロジェクトの統括責任者を務める長尾能雅（よしまさ）副病院長（57）は、この継続性が一定の効果を上げていると実感する。19年には世界各国の医療機関の安全性を審査する医療機能評価機構「JCI」（本部・米国）の認証を日本の国立大病院として初めて取得した。

「人為的なミスによる患者への被害を極限まで減らしたい。そのためには、患者の安全のための専門家ネットワークが必要だ」。さらなる人材育成を目指し、名大病院の取り組みを広げたいと考えている。

（日暮大輔、四方さつきが担当しました）

おたまじゃくし

〈確かに似てる…〉
姉　体育館に集まって校長先生の話を聞いたり校歌を歌ったりしたよ
弟　それ知ってる！　ヒジョウシキって言うんだよね
姉　ヒジョウシキ（非常識）じゃなくてシギョウシキ（始業式）！
母・斎藤恵里
〈そう見えた？〉
（母親がグアム島の写真を見せました）

りょうた（4歳）＝刈谷市、さいとう・ゆうり（7歳）